

正しく評決するに

我々の見解と立場・問題提起 明大戦線

一月四日の情況派、生協幹組と戦線派の武装衝突下表面化した「生協問題」、大学勃興派、マッソ共斗への懲喝問題等々と、我々明大反戦線は基本的視点として、現実の勢力・大家争い・共闘争の中での我々へ「レバは火薬戦線としての」と電流との関係性をもつての立場をうながしていきたいと考える。

大新聞争とて光への裏切り

大新聞幹事は、都口主さんと一緒に「は」に入会当局による宗教審議の一環としてある、大學幹部の専門知識と舟脚すべく、刊年二〇題分白紙前回請求に応じた大東、成績を結集して斗われた。その中で当局の至善改善委・特別対象委・大學改革特別委をも追求することによって、彼等の隊に廻止・改廃運動も裏路していった。そして編集部の独立、新聞編集の自決権未定は幹員が意見においての誤認事項を獲うるに至り、対策にはいかず理事会会評議会解体・全面管理公開とも猶ち取つている。それは現在もほ個別改良斗争に終わるのではなく、学内管理支配体制の解体・そして編集部の解体を目指して今も続けられてい。我々は、大學新聞に対して意見・要望・批判等を語戦線太衆が積極的に行なつてゆる大學新聞が意見表題・批判・反批判の場に対するには發するし、その事自体が大學新聞争の成果のひとつであると考える。その意味では日本反帝戦線意が大學新聞に意見を言つことは当然であり、正しの事である。しかしほがらかに、日本反帝戦線の一日十三日夜の行動は、大學新聞に対する意見表明などではなく、大學新聞を通じての批判・反批判の場すらも自ら破壊していく行為であったと判断せざるを得ない、そのことは「このことへ一月十二日の衝突」は必ず争である。内容については記事にしない方が良いと書くなら書いても仕方がないが、内密いかんによつては済み得ぬ対応

をする』と言う意味の発言を見ても明らかである。更に、十二日の事態について記載した大學新聞一月十三日号、一月二十日号、發行後の一日三九日午後二時半頃、日本反帝戦線は大學新聞編集部、マッソ共斗は訪問され、へ、くるなり「マッソ共斗は情況派に加担している。マッソ共斗の立場性を明らかにせよ」これについては批判としてあるが、暴行を加えねばならぬ事態に至る。編集部の一員に対して、「お前は軍マルだ。」。マッソ共斗は十二日以前に情況派と連絡をとつていた」と根拠のない誹謗を行い、編集部に対して暴力行為を行つた。これは二月、一、二、十日の学苑会拡大中執会議上日本反帝戦線が発言した「論争の過程で起きた」などといふものではなく、当初からそれ(懲喝)を行なうにやつてきたと判断する。

これらのこととは、編集部・マッソ共斗のみならず大新斗争を担つてきに随戦線学生大衆に対する敵対であり、なかんずく大新斗争に対する裏切り行為である。我々は再度日本反帝戦線に対して自己批判を要求す